



緑丹会 LETTER vol.2

兵庫医科大学緑樹会兵庫北部支部会会報



～兵庫医大と出石と私～

西岡 顯

(公立出石医療センター病院長・S55年卒・バレーボール部)

「バレーボールやらん？」

開学間もない昭和49年、大学にはバレーボール部がありませんでした。まずは同好会からと、同級生たちが何の経験もない私のそれなりの身長(177cm)に目をつけ、誘ってきたのが始まりでした。同級生たちが次々と辞めていく中、後輩達に教を乞いながらも練習だけは続け、最終学年まで西医体に出場したことは、大学時代の自分に授けてやれる、唯一の勲章です。

初期研修を終え、同期の県養成医たちがそれぞれに派遣先の希望を述べた後、僻地に行くことを疑わなかった私は、残った候補地＝但馬に赴任することになりました。公立八鹿病院と大雪の舞う4つの診療所勤務を終え、平成元年に出石病院に参りました。「出石といえば蕎麦」とご承知の方も多かろうと思います。弥生時代の古墳跡、飛鳥時代の天日槍伝説、山名から仙石に至る武士の時代の但馬の中心地、幕末には桂小五郎の潜伏地であり、明治は初代東大総長を務めた加藤弘之、第二次大戦前には怒号の嵐の中国会で肅軍演説を行った斎藤隆夫、戦後は巨人の大友工や阪神の能見篤史などプロ野球のエースやロンドン五輪バレーボール銅メダリストの井上香織らを輩出するなど、数多くの歴史が刻まれたこの町で人生の半分以上を過ごしました。この間、プライマリーケアに務めてきましたが、あと少し総合診療医育成のために働ければと願っています。

Face BookでAkira Nishiokaとキーを叩いて頂ければ幸いです。また、二行詩クラブという会にも参加しており、ご興味のある方はお声掛けください。ご招待いたします。



～近況のご報告～

黒田 達実

(公立八鹿病院総合診療科・H3年卒・野球部)

私は2005年4月に公立八鹿病院に赴任し、15年以上勤務しています。2012年4月から2016年3月まで養父市内の養父市国民健康保険大屋診療所に派遣され、無床診療所の勤務も経験しました。2016年4月に病院に戻り、新専門医制度の開始時期であり、基幹施設として総合診療専門研修プログラムを整備しました。以後、臨床研修・専門研修の管理と研修医・専攻医の先生方の支援が私の主な業務になっています。

ペーパーワークが多く、診療に従事することが減りましたが、研修医・専攻医の先生方の診療と学習を支援する過程で自分自身の臨床スキルの維持／アップデートの必要性を強く感じており、良い刺激になっています。

院内及び近隣の医療機関に兵庫医科大学出身の先生がたくさんおられ、大変お世話になっています。これからもよろしくお願ひ申し上げます。



～僻地診療所で思うこと～

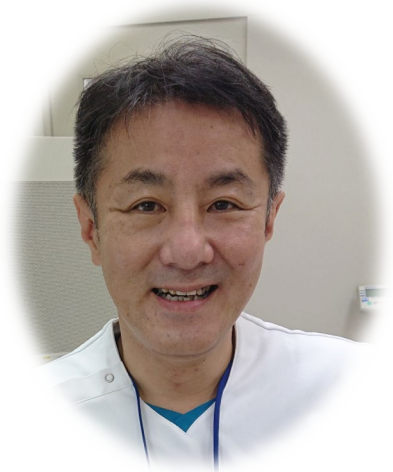
松村 浩司

(東雲・後川診療所所長・S59卒・合唱部)

令和4年兵庫県功労者表彰受賞

僻地診療所の常勤になって10年経ちました。ささやま医療センターの皆様にはいつも大変お世話になっております。ここの常勤になる前の10年ちょっとは私も、ささやま医療センターにいて高齢で状態の悪い患者が紹介されてくると「なんで もう少し早く受診しなかったんだろう？」とか思うことがあった。今、診療所で患者さんの様子を見てみると、わかってきた。診療所までは近所の人に自動車にのせてもらったりして来れるけど、医療センターまでとは頼みにくい。公共交通機関はほぼない。タクシーは高くてもんでもない。自分で運転できれば30分ぐらいの距離だけど、それが簡単ではない。精密検査を受けて手術が必要などという事になると、もとの生活に戻れるか不安になる。自分に体力がないことは解っている。お金の事も心配。後期高齢者で1割負担だとしても高額になる。農業をしている方が多いのでそれが気になる。田植えが・・・黒豆が・・・とか 農作業は時季をのがすと うまく育たないので、それが優先される。(農業は仕事であるとともに楽しみでもある。病気で入院していて準寝たきり状態だった人が退院したというので訪問すると、ゆったり畑仕事をしていたことがある。)そうこうしているうちに状態が悪くなって救急外来や当直時間帯に受診することになる。ささやま医療センターにいた頃から市内の僻地診療所に行っていました。東雲診療所は常勤医師がいない時期もあって、ちょっと顔なじみになると「私の最期を看取ってほしい。」とか言われることがあった。高齢ではあったけど まだ元気なのに。それでというわけでもないけれど私は常勤になった。その後その方たちは認知症になったり大きな病気をして その後施設に入った方もいるが、自宅で看取りをさせて頂いた方もいる。看取りといってもご臨終の時に付き添っている訳ではありません。家族に十分説明して、訪問看護師に協力してもらって、息を引き取った後で(翌日になる事もある)診て診断書を書く。自宅で最期の時を迎えたいと思う人は多いと思う。癌の末期などでもう治療がないとか 老衰の方などが対象になると思う。この老衰が難しい。だいたい高齢になって、歩けなくなって、食事が出来なくなってくるのが老衰という事になると思う。しかし何か原因があってこうなっているのでは？と悩ましい。移動も簡単ではないから そのままになってしまう。老衰という事で訪問診療をしていた女性が便秘がちになってきて、お腹が張ってきて、ベテランの訪問看護師から「大腸癌の末期とちがう？」と言われ、腹部エコーを持って行って検査したところ、大腸癌かどうかはわからなかったが多発肝転移と多量の腹水を認めたことがあった。この方は間もなく亡くなったが、どこかの時点で詳しい検査をして治療をしていれば もっと長生きできたかなと思わないでもない。というような訳で 今後も状態の悪い患者を紹介させて頂くかもしれませんが 何卒よろしくお願い申し上げます。





～近況のご報告～

有井 融

(丹波篠山市国民健康保険今田診療所・H2卒・剣道部)

平成2年卒業生の有井です。第一内科（現在の循環器内科）に入局し、研修・大学院などを経て、国立篠山病院に赴任したのが平成9年3月、その後、米国留学・西宮本院勤務を間に挟み、20年余り丹波篠山の地で働いていることとなります。現在は丹波篠山市の僻地診療所である今田診療所の所長として、どっぷりと地域医療に携わっています。大学病院に勤務していた頃は循環器専門医として狭い領域での仕事をしていたのが、今では小児のワクチン接種、保育園から中学校までの学校医、高齢者宅への訪問診療など、幅広い世代に接することとなり、以前とは全く異なる仕事のように感じます。大学病院から一步離れ、こうも景色が違うものかとしみじみ思います。そうして見えてきた大学病院の良い面・悪い面、色々ありますが、兵庫医科大学ささやま医療センターには地域医療連携の基幹病院としての職責を今後も継続して担っていただきたく存じます。



～近況のご報告～

神原 政仁

(かみはらペインクリニック院長・H9卒・バスケットボール部)

2016年9月に縁あって、三田市に開業しました。以前はささやま医療センターにもペインクリニックの外来がありましたが現在は閉鎖されており、専門医を調べても三田市以北の専門医はいらっしゃらないようなので、当院が兵庫県のペインクリニックの北限ではないかと思っています（笑）お蔭様で、三田市はもとより丹波篠山市、丹波市、遠くは養父市からもご来院いただいております。

しかし、世間一般でのペインクリニックの認知度はまだまだ低く、どんな診療科なのか質問されることも多々あります。改めて説明する必要はないかもしれませんが、ペインクリニックとは痛みの診断と治療を専門に行う診療科で、神経ブロックを主な治療として行っています。治療する痛みとしては、腰痛・坐骨神経痛・带状疱疹関連痛などが多いです。緑丹会のみなさんも、痛みでお困りの際は是非一度ご相談ください。





～近況のご報告～

山縣憲一

(山縣クリニック・S61年卒・サッカー部)

コト窩で日常が一変している令和ですが、7年間（^^；；兵庫医科大学での学生生活（ほとんどがサッカーで鳴尾浜グラウンドと千穂で過ごしていましたが）を経て昭和61年卒業し、気がつけば35年間医療に携わってきました。兵庫医科大学第二外科の派遣医として丹波市の柏原赤十字病院に1994年に入職し2004年に退職後、現在丹波市市島町で開業しております。当時の医局長命令は絶対的な権威があり6ヶ月から1年周期で異動を繰り返す生活でした。西宮市を中心に加古川市 大阪八尾市 川西市 姫路市 河内長野市 浜坂町（現 新温泉町）と渡り鳥生活を送っておりました。浜坂町ではのどかな自然と海の幸、冬には勤務終了後には近隣スキー場へと生活を楽しんでいましたが、1年で都会が恋しくなり医局へ直訴したところ、浜坂町より都会だからと、、、丹波市へ赴任となりました。すでに舞鶴若狭道が開通しており意外に神戸・西宮が近く、一方豊かな自然と山の幸に恵まれ夜空に広がる宝石のごとく散らばる星空、自宅前で蛍やウシガエル・鹿も庭先に見られたことは驚きでした。当時、娘が3才・1才・0才で子育てにはうってつけの環境で腰をすえ早25年が経ちました。一方 医療に関しては2005年頃より全国的に地域医療崩壊が始まり丹波市でも県立柏原病院 柏原赤十字病院の医師数減少により市民だけでなく医療者の不安も大きく、この事態を切っ掛けに丹波医療のあり方に対する抜本的改革として統合案が決議され2019年より兵庫県立丹波医療センターとして地域の基幹病院として地域医療に絶大な貢献を頂いています。兵庫県立丹波医療センター 丹波市立ミルネ診療所として医療提供が一元化され 開業医としても「困ったときは とりあえず 医療センターへ相談」と 判断がしやすくスムーズに次の医療を患者様に提案できるようになったように感じます。高齢化する丹波市民への医療提供は急性期医療だけでは完結せず、その後の社会復帰を見据え回復期医療を含め慢性期在宅の医療提供が必要で、兵庫県立丹波医療センターによりそのあたりの移行がスムーズに提供されるようになりました。

2020年2月には国内で新型コロナウイルス感染症感染者を確認後、日本国内でも爆発的な感染拡大と当初は高い死亡率に医療界もパニックに陥り、日々の診療より感染対策に重点を置いた日常に様変わりしています。丹波健康福祉事務所管轄の丹波篠山市 丹波市ではいち早く兵庫医科大学ささやま医療センターが提案実施いただいたメディカルチェックでのトリアージを取り入れた事や兵庫県立丹波医療センターでは中等症 重症者と兵庫医大ささやま医療センターでは軽傷者中心の管理としっかり住み分けを進められた事でかろうじて、パンデミック時の医療崩壊は防がれたと思います。（原稿作成時点では第7波に突入しており、今後が心配ですが）今なお両病院の先生方の尽力には頭が下がる思いです。さらに近隣に出身大学病院がある事、又緑丹会でのつながりはとても心強いものを感じています。コト窩が落ち着き、又緑丹会が開かれ皆様とお会いできることを楽しみにしております。



Dr. Miyawaki ささやまフォトコラム

緑丹会副会長 宮脇 淳志

(兵庫医科大学ささやま医療センター副院長・H3年卒・写真部)



～夏の午後～

すこし前の写真ですが、夏の昼間、海の近くのショッピングモール前の人っ子一人いない広場を自転車が走って行きます。午後の強い太陽が地面にくっきりと影を落としていました。 BGM：山下達郎「アトムの子」



～夏到来～

7月6日 ささやま医療センター老健前
青々とした稲と山に連なる白い雲の群れ。ささやまにも夏が来ました。西宮と比べて、空が広くて、蒼い。田んぼのうえを渡る爽やかな風が、瞬間、暑さを忘れさせてくれます。 BGM：ゆず「夏色」

～編集後記～

暑い日が続きますが、いかがお過ごしですか？緑丹会レター2号は、近隣の会員の先生にご寄稿をお願いいたしました。ご寄稿のお願いを差し上げますと、皆さま二つ返事で「喜んで引き受けます」と言ってくれます。やはり皆、心の中には母校・兵庫医大があるのだと感じております。

緑丹会事務局 中山真美

(兵庫医科大学ささやま医療センター総合診療科・H9年卒・硬式庭球部)



兵庫医科大学同窓会

緑樹会